

頻頻加入能燒調去火氣碎末塗牙齒甚佳含口洗眼亦可。

〔重修本草綱目啓蒙三十二〕海蠃略○中

紅螺ハ、アキ鈔和名俗名ニシ、又アカニシト呼ブ、形拳螺ニ似テ低ク、大ニシテ圓ナリ、角刺ナシ、外色紫黒、靡モ同色、内ハ純赤色、ソノ肉頭黒ク、中白ク、尾ハ拳螺ニ似テ蒼黑色、青黒腸アリ、味辛辣、肉ノ味甘美ナリ、略○下

〔渡邊幸庵對話〕一赤辛螺、あなたにも稀也、略○申到て赤き貝の事也、即明丹に入る一藥也、予も爲其あなたより二ツ求め来る、其内には類なき赤にし也、略○中松平長門守様へ○註咄候へば、見度と御申故、或時持參して、懸御目に候へば、添とて御戴き故、夫は上げ申事は成不申と申候得共、御聞入なく、ふちを金にてふくませ、根付に被成、いかひ御秘藏也、是はあなたにて、餘程の價する貝也、今一つは大なれ共、色あひ十分に無しとて、取出し見せ被申候得共、少し黒み有之、夫とも終に不見貝なりと、老人被申候、是も代金三十兩程と被申候、ケ様の赤にしをつかわねば、赤薬調合共不申候處、今は爰にもかしこにも赤薬を調合候者有之候、何を合せ候哉、夫共に功あればこそ人々用ひ申候、

〔本草和名十六魚〕小蠃子貌似甲蠃而細小、口有白玉之蓋、出崔禹和名之多々美。

〔倭名類聚抄十九龜貝〕小蠃子 崔禹錫食經云、小蠃子楊子漢語抄云、細螺之太々美、貌似甲蠃而細小、口有白玉之蓋者也、

〔類聚名義抄十虫〕螺子シタマ 海細螺シタマ

〔物類稱呼二十一動物〕細螺きさこ 中國にていしやらがいといふ、伊勢にてごながらと云、肥の唐津にてこぶらといふ、

〔屠龍工隨筆〕矣た、みはきさごの事なり、此貝を童の戯に、舌の先に吸つければ、舌のだみて物の